

---

# ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

HATI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジエネラルの男と竜人の娘〜戦いの果て〜

### 【Nコード】

N0576BA

### 【作者名】

HATI

### 【あらすじ】

とあるMMORPGに嵌っている男。

カンストしたキャラから切り替えて新しいキャラクターを作成し、育てていた。

起きると見知らぬ場所に放り出され、身体は自分の物ではなく、育てていたキャラクター。

そこから始まったのは、男にとって過酷な物語。

与えられた力は天下無双には遥かに遠く、立ちほだかる敵は強大無比。

寄り添うのは竜の血を引いた少女と、仲間達。  
彼の戦いが否応無く幕を開けた。

## 初めての大地（前書き）

ファンタジー小説となります。

## 初めての大地

キーボードを叩く硬質な音が閉め切られた部屋に響く。他にはパソコンのHDDが僅かに煩い程度だ。

10分もしないうちにキーボードを叩く音は静かになり、それを叩いていた男はゆっくりと体重を椅子の背もたれに預けながら、ペットボトルのお茶に口を付ける。

「今日はここまでにしとくか。またMP回復剤買い込まないと」

昨日あれだけ買い込んだのに、と男は内心溜息を付く。

パソコンの画面には、2年ほど前に始まったMMORPG「デイエス」のプレイ画面と、彼の操作するキャラクターが移っている。

時刻は既に深夜2時を回っている。

彼は最近派遣の仕事を満了した為、資金に少し余裕がある此処2ヶ月はこの「デイエス」の新キャラクター育成に費やそうと決めていた。初期のキャラクターが最高レベルになり、装備も質は上限に来てしまっている。

新しく装備を更新してもバリエーションの違いにしかならない。

その初期キャラクターをプレイ中に特殊職業のキーアイテムを手に入れた為、

朝のうちからその特殊職業を作成し育てていた。

その職業は「ジェネラル」、將軍の職業だ。

MMOでは余り見かけない職で、ソロが主な彼もその目新しさに加え作成に必要なキーアイテムも手に入ったことで作成した。

レベルは50ほど。レベル制限ギリギリの装備と回復剤を注ぎ込む事で加速してあるとはいえ、数日で上げたにしては上出来だ。

最高レベルの150までは遠いが、ステータスはある程度上がってきている。

これなら暇な間に100は目指せると男は先ほど落ちた気分を良くし、パソコンを付けたまま布団に入り込む。

明日は次の狩場に行こう。あそこは金銭も経験値も悪くないし……そう考えながら、男は眠りに落ちていった。

次の日、男の身体はもうそこには無い。

「んあ？」

寝転がっている男が陽射しの鋭さに目を覚まし、抜けた声を出す。

「なんだ？」

カーテンで遮られている筈の直射日光に炙られる事の不快さと、疑問。

そもそも男の背中感触は慣れ親しんだベットのものではない。

男は身体を起こし、周囲を見る。

地面は草が生い茂っていて、近くには端が此処から見えている小さい湖。

周囲を木々が囲んでいる。

森の中の湖、といった印象だった。

「いや、いやそうじゃないだろ」

なんでここにいいのか。いやそもそもここは何処？

そんな疑問がぐるぐると男の中で渦を巻くが、夢だと判断し頬をつねる。

「……痛い」

男の希望は外れ、男は少し迷った後勢い良く後ろに倒れこんだ。

「意味わかんねえし」

こんな景色に見覚えは無い。

それにこんな鎧着込んだ憶えも……

(鎧!?)

焦って身体を起こし、身体の内側をのぞく。

武装している。剣は直ぐ横に置いてあるし、全身に軽装とはいえず鎧を着ていた。

「こんなもん持ってた憶えも着た憶えもねー、おいこれ」

まったく身に覚えが無い事が続いていたが、ふと見た剣、それに

鎧に僅かばかり男は引っかかりを憶えた。

つい最近、つい直前まで見ていた覚えが……

「ああ、これ「デイエス」の装備、か？」

「「デイエス」の熟練プレイヤーである以上、装備の見た目を見間違っただけだ。」

剣の模様も装飾も、僅かの違いも無く同じだ。

それに気付いた時、男の心臓の鼓動は一気に加速する。

それは恐怖と危機感による物だった。

ドツドツドツ、そう心臓に急かされる。

急いで湖へ駆け寄り、水面に反映された顔を見る。

「お、俺じゃない……、こいつ、ベルギオンじゃねーか」

寝る前まで上げていた自キャラの顔が、紛れもなく水面に映っていた。

数分ほどじつと水面を見つめていたが、しばらくして長い時間を掛けて防具を外し、

ベルギオンは何度か水を救って顔を洗う。

湖の水は澄んでおり、恐らく煮沸や濾過をしなくても飲めそうだ。

防具を外しかなり楽になった後、分からないながらも情報を整理する。

「俺は確かに部屋で寝ていた、よな」



一つ、ここは全く見覚えは無い。  
二つ、手持ちの物をひっくり返したところ、金以外は寝る前に持ちキアラ……、  
ベルギオンが持っていたものと同じだった。サブだったこともあり大した物は無かったが。  
三つ、意識しないと思いつけないが、ベルギオンの記憶が断片的にある。それは俺の操作してきた経歴とほぼ相違なかった。

分かるのはこの程度だ。

そして、この現実感を否定できる材料は一向に無い。

つまり男はベルギオンで、見知らぬ世界に放り出されたことになる。

その結論に辿りつき、ベルギオンは頭を抱える。

「嘘だろお……いや嘘じゃねえ。意味が分らんぞ」

そう呟いてもこの悪夢から覚める様子は無い。

ベルギオンはガリガリと苛立ちから頭を掻くが一旦思考を切る。

これ以上考えてもどうしようもない袋小路だからだ。

脱いだ鎧や手甲、足の脛当てを取り付ける。

防具のつけ方など分らなかったが手が憶えているのか、思ったより早く付ける事が出来た。

もしこのままなら現状で生きていく事になる。

得てして防具、特に鎧は高額なものだ。

レベル制限の関係でレベルにしては良い程度の物だが、  
金も無い以上多少苦しいという理由で置いて行くわけにもいかない。

そもそも、人間が居るのか？  
もし俺しか人間が居ないとすれば

そんな想像をしまい冷たく血が凍るような感触が全身を舐めた。

！

「なんだ？」

何か今聞こえたか？

そう思いベルギオンは背後へと振り返る。  
そうすると、以前では不可能であっただろう距離まで鮮明に見える。

確かこの職は命中補正もあった筈だ。この視力はその影響だろうか。

その視力に、モンスターに襲われる少女がハッキリと移った。

僅かにベルギオンは迷ったが、剣を掴み駆け出す。  
以前の肉体より遥かに早い動きに意識が付いていかず、  
こけそうになるが強引に力で傾いた体を振り戻す。

（なんつー身体だよ。明らかに筋肉の量と密度がかつてと違いすぎる）

ぐんぐんと距離を詰めていく。少女は逃げているが、モンスターの方が早い。

その上3体が組織立って追いつめている。猶予はほぼない。追い立てているのはやけに筋肉の付いた緑色の小人。見た事は無いが、イメージとしてはゴブリンのやつだ。

ベルギオンはそう判断し、より力を込め速度を増す。

その走る音に少女が気付くほど距離が狭まった時、ベルギオンは軸足となった右足を蹴り上げ、先頭のモンスターに対し膝蹴りを顔面に決める。

走ってきた速度と蹴り上げた力が合わさり、モンスターの首が縦に180 捻じ曲がる。

こいつはやった。そういう手応えだった。

残りは二体。木で作った棍棒をそれぞれ一つ持っている。

ベルギオンが僅かに後ろを見ると少女が倒れている。体力の限界のようだ。

勢いで来てしまったが、喧嘩程度ならまだしも、生死に関わるような戦いの経験は全く無い。

身体能力で遅れを取ることはなさそうだが、走ってきた疲れによる汗とは別の冷たい汗がじわりと額に流れる。

ゴブリン達はいきなり現れて一体屠った男に戸惑いを感じたものの、ベルギオンの覇気の薄さに勝機が高いと見たのか武器を構える。

見た所、二体一というハンデがあるが、あの棍棒を直撃しなければ戦えそうだ。

しかしベルギオンに複数に囲まれた経験は無い。どうなるか分からない。

( 先手、取るか……！ )

剣を抜き、両手で構える。

握り方は身体が勝手に教えてくれる。

力を込めて、振り上げてから一気に振り下ろす！

重い長剣を振り下ろす事で重い風圧の音が響き、予想以上の力に身体が前に持っていていかれる。

剣線上にいたゴブリンは避けようとするが、力を込めて加速のついた剣をかわせず大きく斬れた。

完全に姿勢が崩れたベルギオンの頭を目掛けて、最後のゴブリンが棍棒を振り下ろす。

ベルギオンは咄嗟に地面に突き刺さった剣から手を離し右腕で頭を庇う。

ぐわん、と身体が揺れる。

手甲の防御力が優ったのか、痛みは無いが衝撃で右腕が痺れる。

( くそ、見た目より響くじゃねーかよお…… )

頭に受ければ致命傷は免れないだろう。

ゴブリンは気色の悪い声で笑い、更に棍棒を振り上げる。

「 図にのってんなよくそ！ 」

その笑いにベルギオンは不快感が優り、咄嗟に右足で腹を目掛け

て前蹴りを離す。

さっきの一撃で僅かにひるんだ事で完全に油断していたのか、蹴りが綺麗に腹に入った。

「GUGAaa!？」

腹を蹴られ、胃液と悲鳴を撒き散らしゴブリンは一目散に逃げ出した。

ベルギオンは出来れば倒しておきたいと思ったが、初めての戦いで気力と精神力が疲労したのか、

一気に疲れが出てくる。

ベルギオンは座り込んで乱れた息を整える。

何度かの呼吸で呼吸のリズムが戻った。

「っと、そつだ。さっきの女の子は」

完全に忘れていた事に気付いて焦りつつも、ベルギオンは少女に近づく。

金髪、というよりは茶色の髪の毛。

あどけない寝顔だ。多少汚れはあるが傷などは見当たらず、呼吸も安定している。

素人目には分からないが、問題は無さそつだ。

しかし、余程疲れていたのかすぐには目は醒ましそつに無かった。仕方ないので、お姫様抱っこで湖の近くまで連れて行く。

ベルギオンは、人が見つかった事に、目が覚めてから初めての安堵を抱いたのだった。



## 竜人の村

(小さい獣とかもいたし、森から連れてきて正解だったかな)

ベルギオンは女の子を湖の片隅に降ろし、座り込んで湖の水で喉を潤した。

地下水が通っているのか程よく冷えていて、先ほどの疲れが乾きと共に癒えていく。

森には獣の気配はするが、此方に襲い掛かるような危険なものはいないようだ。

(人が居るって分かったのが不幸中の幸いかねえ。さっきのモンスター見ると差し引きだけど)

先ほど追い払ったゴブリンは普通の獣より知能があり、そして暴力的だ。

誤って動物を殺してしまったときの嫌な感じが心に湧いたが、ああしなければ多分女の子を助けられなかっただろう。

ベルギオンは割り切れたわけではないが、そう思う事にした。

ああいった奴らが居るといふ事は、日本に居た頃よりもずっと気をつける必要がある。

道端で襲われてしまうような世界だと思っただ方が良いだろう。

「ゲームならまだしも、これは向いてねえ……」

真つ当に生きてきたベルギオンの価値観は未だ以前に引きずられているが、

大分引いてきた右腕の痺れで戻される。

初めての戦いで生き延びた事よりも、これからを思うとベルギオンは不安を感じた。

「ん、ん」

そうしている内に女の子が起きたのか、目が薄っすらと開いていく。

すると勢い良く体を起こし、両手で体を押さえて怯えた顔で左右を見渡す。

襲われる寸前に意識を手放していたから、危機感がまだ強く残っている様子だ。

「落ち着け」

「あ、え、あなたは……、ゴブリン達は!？」

(会話が通じた。内心少し不安だったんだが)

日本語でどうやら通じるようだ。

異国語だった場合間違いなく面倒な事になっていただろうと考えていた為、

心配事が一つ無くなる。

「あんたを追いかけてきた奴らは追い払った。少なくとも今は大丈夫だ」

「そ、そうですか」

女の子の体から力が抜ける。

そこでようやく俺に意識が向いたのか、姿勢を正して俺に頭を下げる。

しかし、ベルギオンを見る目や体が少し硬い。警戒はされてるの



かもしれない。

「助けていただいたようでありがとうございます。助かりました」  
「運良く居ただけだ。見殺すのもどうかと思ったしな」

「いえ、命の恩人です。何かお礼をさせていただきたいのですが」

（中々義理堅いようだ。いやこれが当たり前なのか？ 俺も命の恩人がいたら頭が上がらないか）

女の子はしっかりと此方を見据えている。目は髪と同様、鮮やかなブラウンだ。

服は中世的というか。ロングスカートにシャツ、その上にカーデイガンを羽織っている。

しかし、ベルギオンは腕を組んで考え込む。

お礼と言われても困る。まさか金を巻き上げるわけにもいかないし。

とはいえはつきりいつて今のベルギオンには何も無いに等しい。人間が生きるために必要なのは……

「そう言われると悪い気はしないな。

お礼か……すまないが食事と今夜の寝床どうにかならないか」

そう言われた女の子はきょとんとした顔をし、先ほどより盛大に力が抜ける。

もしかしてお礼に体でも求められると思ったのかももしれない。

可愛い女の子は好きだが、見た目14そこそこの娘に手を出すほど道を外れてはいない。

「分かりました。そういう事でしたら、うちの村に来ていただければお力になれます」

俺が変な男ではないと思ってくれたのか、女の子は大分声に張りが出ている。

しかし村か。色々聞くことができるかもしれないな。

「あ、私はラグル・ロティエといいます。ラグルでいいですよ」

「俺は……、ベルギオンだ」

「ベルギオンさんですか」

迷った末、本来の名前でなくベルギオンと名乗る。

幾つか理由はあったが、今はこの名前の方がらしいだろうと判断した。

ラグルは名前しか言わなかった事を少し不思議に思った様子だったが、

大したことではないと判断したのか失礼しますね、と言って手や顔を洗う。

ずっと走っていたから様子だし汗が気持ち悪いのだろう。

ここは少し風が強いし、このままここに居たらラグルが風邪を引いてしまうかもしれない。

「何時までもここに居るのもいかな。少し陽が落ち始めているし落ち着いたら村に行こう」

「分かりました。村へはここから20分くらいで着くと思います」

顔を洗い終わったラグルはそう言うのと立ち上がり、此方です。と案内し始める。

見た目は華奢なようだが、しっかりしているようだ。

ベルギオンも立ち上がり、ラグルに付いて行き森へ入る。

森を移動がてら幾つか話してみるとしよう。

そういえば此処がどこかも気になるな。むしろそれを先に気にするべきだった。

「ベルギオンさんは冒険者の方ですか？」

「ん、まあそんな感じか……、どうして？」

「北の大森林でもこの辺りは奥まっけていて、余り普通の人間の方はいらっしやいません。」

それに私を襲ってきた三体のゴブリンを追い払えてましたし」

（北の大森林……、聞いたことはないな。この世界はディエスではないのか？）

「ちよつと待つてくれ。ここは北の大森林っていうのか？」

「？ ええ、そうですよ。ご存知無いですか？」

「あー、えーと、田舎の方から出てきてね。全然詳しくないんだ」「それは……、知識無しでこの森に入るのは危険です。」

普段なら危険なモンスターは居ませんが遭難してしまいます」

と、ラグルは少し怒ったような顔をしてベルギオンに忠告する。

「あ、ああすまん。あー少し聞きたいんだが、

クラッグスやペルペイトって国を聞いたことはあるかな」

クラッグス、ペルペイトはディエスの中でも大きい国だ。

ここがディエスの世界なら知らないという事は無いだろう。

ベルギオンは内心そう思いながら、心を必死に落ち着かせながら答えを待つ。

「えっと、すみません。どちらも聞いた事は無いです。」

この辺りで一番大きい国はティレ王国ですね」

「ッ」

それを聴いた瞬間、

心の何処かが捻じ曲がるような負荷をベルギオンは味わう。

(まだ、まだディエスの世界なら知識で何とかできた！)

ベルギオンは僅かだが、此処がディエスの世界ではと期待していた部分があった。

しかし、ティレ王国などという国は無いし、ある筈の国は無いという。

口の中に苦々しい思いをベルギオンは感じていた。

「……そうか、いや大したことじゃない。そうだ。

さっき普通の人間って言ってたけど、人間以外にも来たりするの  
か」

そんな事も知らないんですか、と言いたげな少し冷たい視線がラグルからベルギオンに浴びせられる。

その視線に耐性の無かったベルギオンは少しだけ竦む。

「そうですね。えっと、北の大森林はエルフ族やドワーフ族、

それに私達竜人族や他にも亜人族達が主に暮らしているんです。

住んでいる場所は種族毎に分かれていますけど」

「竜人……俺には普通に見えるけど」

それに竜人という言葉は始めて聞いた。

どういう種族なのか気になる。

そう言うとラグルは少しだけ悲しげな顔をしてしまう。悪い事を  
きいたか。

長老に竜人について聞いてみる方が良いかもしれないな。

「血が薄いので。夜目が利く程度です。濃い血を受け継ぐ人はもう殆ど居なくなってます」

「なるほど」

「この辺りは余り危険な獣やモンスターは居ないので、今まで問題はなかったんです。でも最近ゴブリン達が住み着くようになって……」

亜人族。ゲームやアニメなら良く見かけていたが、実際に居るよ  
うだ。

イメージは湧くが、実際にあってみないと何ともいえない。

ただエルフは綺麗なイメージで描かれる事が多い。一目見てみて  
みたい。

「あいつ等が出てくるようになったのは最近か」

「はい。長老はロードゴブリンが来ているかもしれないと」

「ロードか。そりゃまずいな」

ロードってなんだ。と思ったが有名な言葉かもしれない。

冒険者で通じた以上聞くのもまずいだろうか。

会話の流れから多分かなり強いゴブリンだろう。

「姉が討伐に出ようとしたんですが皆に止められてしまって」

「そりゃ凄い姉ちゃんだな。ただあいつ等は群れてるし一人じゃ無理  
だろ。」

止めて正解だよ。しかしそうするとラゲルが襲われたってのはま  
ずいな」

「はい。始めは農作物が荒らされたりする程度だったんですが、  
数が増えてきたのか最近過激になってきて。でも襲われたのは初

めてです」

追われた恐怖を思い出しのか、少しラグルは身を振るわせる。そのラグルの頭に手を載せ、何度かやさしく叩いてやる。

(甥っ子はこれで笑顔になったもんだが)

「や、やめて下さい！ 恥ずかしいです」

とラグルに怒られてしまう。

内心少ししょんぼりした。まあ女の子の頭を気安く触る物でもないか。

しかし元気は出たようで、なによりだ。

その表情を見て、ベルギオンは心の動揺が収まっていくのを感じた。

諦めるのはまだまだ早いだろう。遭難も防げた事だし。

「見えてきましたよ」

ラグルに言われてベルギオンは正面を向くと、森を広く切り開いて出来た町が見えてくる。

森の中で作ったにしては中々大きい。少しずつ切り開いてきたのだろう。

家は木で出来てる。それに畑等も手入れされていた。

先ほど川もあったし、人里から遠いみたいだが住むだけなら大変だが悪くない場所なのだろう。

「先に長老の家に案内しますね」

「頼んだ」

ラグルに続いて町を歩く。

余所者のベルギオンにどう反応するのか気になったが、ラグルが居るからか多少じろじろと見られるものの変な視線は感じなかった。

「ここです。長老、いらっしやいますか」

ラグルはそう言って一回り大きい家のドアを何度かノックする。

「あいとるぞ」

少ししわがれた声の中から聞こえてくる。

ラグルはドアを開けて、ベルギオンを中へと促した。

「失礼します」

「失礼」

中に入ると、材料は竹や木ばかりだが見事な家具が幾つも置かれている。

そこに白い髭を伸ばした男の老人が椅子に座って茶を飲んでいた。

「どうしたラグル。それに其方の男は誰かの」

ジロリと、長老に見据えられる。

この眼、まるで観察されているようだ。

少し癪に障ったが、村の若い娘が誰かも分からない男を連れてきたんだ。

その位はされるものかとベルギオンは勝手に納得する。

「薬草を摘みに湖の近くへ行ってきたんですが、そこでゴブリン達

に襲われて……、

「このベルギオンさんに危ない所を助けて貰いました」

それを聞いた長老は先ほどの態度を会釈で謝る。

「おお、それはラグルが世話になりましたな。しかしゴブリン共、とうとう我らを襲い始めたか。」

ラグル、お前は一度家に戻りキリアに無事を伝えてきなさい。ベルギオン殿と少し話がしたいのである」

「分かりました。ベルギオンさんは食事をしたいと言っていたのでその用意もしてきます」

「構わん。芋を煮たやつがあるのでこっちで食事を振舞うとしよう。構わんかなベルギオン殿」

そう意見を振られ、ベルギオンは反射的に頷いてしまう。

とりあえず食事は食べれるようだ。

そうしてラグルは家へ戻り、長老は鍋の置いてある竈に火をつけてベルギオンに茶を振舞う。

「たいした物はないがの」

「いえ、朝から何も食べていなかったなので助かります」

「ずずっと、茶を啜る。」

何かの葉っぱを干した物だろう。

すこし渋みはあったが美味しく飲める。

「さて、まずはラグルを助けていただいた事、感謝に堪えませぬ」

「いえ、運が良かっただけです。襲っていたやつらもそうやばいモンスターでもなかったし」



「それでもベルギオン殿が居なければ命が危うかったようだ。さて、今日は宿の当てはあるのですかな」

「恥かしながら全く」

「ではラグルの家の隣に小屋があった筈。それを使うといい。キリアにも伝えておきましょう」

「キリア？」

「おお、これは失礼。ラグルの姉で家長のキリア・ロティエの事です」

「そうでしたか。屋根のある所なら問題ありません」

シートなんかはあるみたいだし、野宿よりは全然良さそうだ。

(野宿なんて経験も無いしな)

旅人は珍しいのか、長老は他にも幾つか上機嫌で話を振ってくる。少しでも情報が欲しいベルギオンにはそれは願っても無い事だ。年寄りの長話に感謝するときが来るとは思わなかったが。

「ベルギオン殿は冒険者の方ですか？ 商人でも中々此方には来ませんし」

「ええ、旅をしながら移動しています。ただ森で道に迷ったようで大分深い所までできてしまっただけです」

「なるほどのう。今は刈り入れ時で人手がありませんが、手が空いたら道案内をつけましょう」

「良いのですか？ 案内人も帰り道が危険では」

「キリアに頼みましょう。彼女なら多少のゴブリンは物ともしません。

大した礼にはなりません。がそれまでは逗留すると良いでしょう」

それは願っても無い相談だ。

金もないし、何をすることもある程度人のいる大きい町に行きたいと考えていた。

森を抜ければ道くらいはあるだろうし、次の指針になる。

ベルギオンはそう考えて、是非とも御願ひします。と頭を下げた。

「おや、スープも温まったようですね。お注ぎしましょう」

「御馳走になります」

出されたスープには大きく切った芋が幾つも入っており、付け合せに硬く焼かれた白パンが出された。

こういう村では食料は貴重な筈だ。味わって頂こう。

温かいスープは塩が利いており、パンもスープに漬けるとふやけて食べやすくなる。

自分で思っていたより腹が減っていたのか、ベルギオンはガツガツとスープを平らげてしまう。

満ち足りた気分だった。

「御代わりはいりませうかな。ああ遠慮はいりませぬぞ。芋は掘れま  
すし塩は海が近いので安く手に入ります」

「すみません。ではもう一杯だけ」

よそつて貰ったスープを、先ほどより味わって食べる。

暖かい。今此処に生きている感覚を、ようやく味わえた気がした。

## 竜人の簡単な歴史、そして悪い状況

芋は旨い。芋に味は無いが、スープの塩が効いていてホクホクしていた。

「さて、満足戴けたようですね」

「ええ、ご馳走様です。美味しかったです」

長老は勢い良く食べたベルギオンに気を良くしたのか、上機嫌だ。しかし大分歳をとっているだろうに、かくしゃくとした老人である。

食器を重ねて水場へと持っていく。

「おお、すみません」

「いえ」

再び席に座り、渋みのある茶をすする。

落ち着いた雰囲気だ。聞くなら今かとベルギオンは判断する。

「少し聞きたいことがあるのですが」

「なんですか？ 答えられる事でしたらなんでもどうぞ」

「はい。私は田舎の方から出てきましたね、いまいち地理が分からないのです。

地図があれば見せて欲しいのですが」

「なるほど、そういえば準備無しに北の大森林に来て迷われたのでしたな。

余り広い範囲ではありませんが、地図は奥にしまって有りますので探しておきましょう。」

直ぐ見つかると思います。その時は連絡しますよ」

その親切に、思わずベルギオンは頭を下げた。

「ありがとうございます。助かります。あともう一つ、

良ければいいんですが、竜人に付いて教えてもらえませんか？」

「良いですぞ。今となっては有名な部族では有りませんが、隠すようなことも有りませんのでな」

そう言つと長老はパイプを取り出し、かまわんですかな？ と聞いて了承すると火を付け一息吸う。

「始まりは聖年1年、今から800年ほど遡ります。この辺は神話として伝えられているので省きますぞ。

もし興味があれば街で本を読むのも良いかもしれませんな」

そう言つて長老は竜人の歴史を語り始める。

(歴史もいずれ調べる必要があるか)

「当時は魔物の数はとてつもなく多く、この大陸を支配していたと言われています。

そこで数少ない抵抗勢力が竜だったので」

「竜？ 竜人では無くて？」

「ええ。当時の竜は今大陸に居るモンスターの龍とは違い、高い知能と莫大な魔力を持っていたと言われております。

数は少なかったが、魔物もおいそれと手が出なかつたとか。

それでも少しずつ押されておりましたが、そこで聖魔大戦が始まります」

聖魔大戦？ その言葉にベルギオンは頭を傾げる。  
聞いてみたいが、紀元元年で起こったって事はかなり有名だろう。

(本もあるらしいし、ここで聞くより自分で調べてみるか)

「この戦いは有名なのでしっておりますかな？　そこでの戦いで魔物を一度この大陸から滅ぼしましたが、

その戦いで竜は絶滅の危機に瀕します。

聖魔大戦の折地上に降りて人々と共に戦った神は、魔物との戦いで武勇を振るった竜が居なくなる事を惜しみ、

人と交わるように竜を人へと変えたといえます」

「それは……. . . . . なんとかいうか、御伽噺のような話ですね」

「そう言われるのも仕方ないですか。ワシも全てを信じているわけでは有りませんが、代々伝わってきましたの。

その当時の竜人は竜であった頃と変わらないほど強く、また人となった事でより知恵をつけたといえます

しかし、人と交わる事は出来ても、血が合わなかったのか子供も出来にくく、生まれた子供は親の竜人より大分弱かったと言います

「血が……. . . . . ではこのような奥に住んでいるのは」

「ええ、血を守る為でも有ります。もはや人と変わらなくなるほど薄くなってしまいましたかな。

寿命も人と変わリません。それに初代の竜人は空白の100年の間に亡くなってしまったと伝えられております。

彼らは純粋な竜でしたから、もしかしたら生きていたら今でも居たのかもしれないな」

「竜は偉大な先祖なんですね」

「ええ。今の時代で濃い血をもったキリアは竜を特に尊敬しております。無論、ワシ等も」

「ですか。話して頂きありがとうございます」

空白の100年。戦いの後に何か起こったようだ。

(しかし、血は薄くなったといっても大分歴史のある一族なんだな)  
長老も、どこか誇らしそうに見える。

それだけに、血が薄くなっていくのは悔しいのかもしれないとベルギオンは思った。

何か声をかけようとするも、良い言葉は思い浮かばず、止む無くベルギオンは別の話題を尋ねる。

「そういえば、ロードゴブリンが近くに住み着いたとか」

「ラグルに聞きましたか。一月ほど前からゴブリンの姿を見るようになりましたかの。」

ゴブリン自体が群れで来ることは、決して珍しい事ではないのですが。どうにも巣穴の大きさが違うのです」

巣穴の大きさというと群れの数が違うのか、それとも大きい個体でも居るのかもしれない。

「大きい個体がいるかもしれない」

「ええそうです。数もどうやら多い。繁殖力が強いにしても多すぎる。これ程の数を引き連れているとなると」

「それでロードゴブリンが居ると」

そのベルギオンの言葉に、茶で喉を潤しながら長老は頷く。

「見たわけではありませんがの。ほぼ確実だと思われまますな。」

それ以上のランクであれば一ヶ月も待ちますまい」

「私はロードゴブリンを良く知らないのですが強いのですか？

キリア……さんが討伐に出ようとして止められたとか」

「ええ、若い衆に止めさせました。ゴブリン種の中では中の下位ですかな。」

「対一ならキリアなら討てる可能性は有りますが……、ゴブリンの長はその群れの中で強い個体を護衛として引き連れておりましてな。」

「確か、キリアさん以外は血が薄いのでしたか。それは厳しいですね。」

「キリアは確かに魔法も使え腕っ節もありますが、情けない事に他のワシ等は普通の人間とそう差はないのです。本来ならこういう時、エルフの部隊に救援を求めますが。」

竜人に付いて詳しく知りたかったが、きな臭い話になってきた。

「それなら今回も。」

「そう思い伝令を若い者に行かせましたが……」

エルフの街の近くにゲヒル・オーガの群れが出たようでそちらに手を取られております。」

「エルフの街に。」

「エルフの部隊は精強での。ゲヒル・オーガの群れでも落ちる事は無いですが、半月は動けないと返答が来ましてな。」

「では他の。」

その言葉に長老は首を振る。様子に疲れが見えた。

「遠すぎるのです。竜人は元々交流は薄く、離れて住んでおります。交流のあるエルフの街でも近いとはいえませんが。」

「そうですね……、ではどうされる御積りで。」

「討伐の為の冒険者を呼ぼうにも金も無く、必要な人数の居るグループは北の大森林の奥には来ようとしません。」

広いだけの森で得る物ありませんし、うつかり集落に入り込む  
こめば好戦的な亜人もおりますからな」

「……」

「おお、つまらん話をしてしまいましたな。

何、武器くらい備えております。ワシ等も竜に連なる物としてそ  
う軽々とはやられませんよ。」

「ですか」

かなり悪い状況ではないだろうか。

協力相手の救援は無い、冒険者も呼び込めない。

まともに戦えるのは腕が立つとはいえ、女一人

ベルギオンは嫌な味にする唾を飲み込む。

少しの間沈黙が流れ、ドアから控えめなノックが聞こえる。

「失礼します。姉に伝えてきましたので、戻ってきました」

そうやって姿を現したのはラグルだった。

汚れていた髪や肌は綺麗になり汚れた服を着替え、動きやすい薄  
着になっている。

「おおラグル、来たか。ベルギオン殿には刈り入れが終わるまで逗  
留してもらったことになったので」

「あ、そうなんですか？ そうか、今道案内が出来るのは姉だけで  
手が空いてないからですか」

逗留という言葉聞いて、ラグルは少し笑顔になる。

旅人が来るのも珍しいだろうし、話でも聞いてみたいのかもしれ  
ない。

「うむ。ワシが後で伝えてもいいが、ラグルが言うておくかの？」



「そうですね。私から言っておきます。あれ、どこに泊まる事になったんですか？」

「確か隣の小屋、今あいとるな？　そこにベルギオン殿に使ってもらおうかと思つての」

「あの小屋ですか？　確かに空いてますが、余り掃除もしてませんし……」

「構わんよ。屋根と、あと体に掛ける布か毛布があれば」

ラグルは小屋に止める事を想定してなかったのかいまち乗り気ではない様子だが、

ベルギオンとしては一先ずの宿が確保できた時点で良しとしていた。

場合によっては洞穴を探して、そこで寝たり野宿の可能性もあった事を考えればなおさらである。

「ベルギオンさんがそういうのであれば。寝る広さはありませんけど、物置小屋として使う事もあるので本当に綺麗じゃないですよ？」

「それほどか。なら筈があれば貸してくれ」

「はあ、仕方ないですね。とラグルはため息をつく。ハキハキと言う子だな。」

しかし、先ほど長老とベルギオンの中で漂っていた少し暗い空気は完全に無くなっている。

それは間違いなくラグルによるものだった。

「分かりました。姉も感謝していただきますし問題は無いと思います。」

長老も言っていたと伝えますので。話は終わつたんですか？」

「ええと、大体は終わりました、かね？」

「ですか。逗留されるのですからまた話す機会もありましょう」

「ええ、是非とも御願ひします」

「では私に付いてきてください。家まで案内します」

そう言うラグルにベルギオンは付いていき、家の外へと出る。話を聞く中で、ベルギオンの心の中である思いが生まれ始めていた。

長老の家から5分ほど歩いた所で、木で出来た家と小さめの小屋が隣合っている場所に付いた。

「ここが私と姉の家です。父や母は既に天に召されているので二人で住んで居ます」

「それは……苦労しただろう」

「姉も居ましたし、竜人の村は皆仲が良いのでなんとかなってます。畑も姉は力があるので維持できますし」

「そうか」

「ではどうぞ。姉に紹介もしなければいけませんね」

自分から言ったという事は本当に気にしてないのだろう。

しかし村の助けがあるとはいえ女性二人で生きていくのは大変だろう。

(逗留させてもらう間何か手伝うのもいいかもしれないな)

ベルギオンは密かにそう決心する。

「どうしましたか？ 遠慮しなくても良いですよ」

ベルギオンの足が止まっているのを不思議に思ったのか、ラグル

が声をかけてくる。

「悪い。今行く」

ベルギオンはそう言って家の中に入る。

入った部屋には、入り口横にラグルが控えていて、真ん中に女性が一人立っている。

ベルギオンは、その女性の存在感に目を奪われる。

赤く胸まで伸びた艶のある髪。

強い意志を思わせるやや釣りあがった眉。

赤く凛とした目。

服は動きやすいハーフズボンに、絹のシャツと動物の皮をなめして作ったと思われるジャケットを着ている。

胸は大きい、と言うほどではないが細い腰と、相俟ってそれなりにある。

歳は18ほどだろう。肌に張りがある。

妹のラグルはまさに村娘といった感じだったが、

逆に姉のキリアはかなり活発な狩人のような印象を与える。

何よりも、存在感が違う。竜人の濃い血のなせる業か。

女性は入ってきたベルギオンに近づき、口を開く。

「キリア・ロティエだ。妹が世話になった、礼を言う。ベルギオンだったか？」

「ああ合ってる。巡り合わせが良かったようだ。俺もあのままだと遭難していたし」

そういってキリアは握手を求めてくる。

ベルギオンは女性の手に少しドギマギしたものの、握り返した。中々気の強いようだ。しかし話しやすい。

ベルギオンもそれに合わせ、緊張していた気を少し緩める。

「姉さん。長老が隣の小屋をベルギオンさんに寢床として使わせて欲しいそうです」

「小屋か。確かに他に空いている家は今はないな。ベルギオンは構わないのか？」

「その質問は三度目だ。全然問題ない」

「なら使うといい。掃除の為の道具は貸そう。私達の小屋だし私達も手伝う」

「助かる」

「では道具を取ってきますね」

そう言ってラグルは奥へと引っ込んだ。

とりあえず、世話になる場所を掃除しよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0576ba/>

---

ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

2012年1月3日03時46分発行